



三代目
三遊亭金馬

「泣く子と地頭には勝てぬ」

名譽院長 西 田 敬

型に嵌った決め台詞や能面をも模した様な舞台化粧にも無縁、舌先三寸だけが勝負の男の世界。台詞回しの歯切れ良さに加えて、端坐した和服姿、顔見ただけでも可笑しく為る風貌。誰が何と言っても天下一品、三遊亭金馬は三代目に限る。古い癖は百も承知だが地頭を宥める上からも、蒸し返す。人名をひらがな混じりで書く事の失礼と、愚の骨頂さ加減は草薙君の件で漸く行き渡って来た。草薙の剣を敢えて漢字で書けば誤りで、日本人の愧なのか。三種の神器も書けないで、何が日本語か乎。何とか審議会の尊大にして、偉大なる功績、茲に極まれり。阿呆クサさ序に、別件も付加えれば、近頃、駆出し医者に課せられた卒後臨床研修がある。空辣な響きも然る事乍、将に屋上に屋を架す、愚の骨頂で阿呆丸出し振りは群を抜いて、他の追隨を許さぬ。6年間もの医学部教育で未だ不服ならば、責めて、医学英語は疎か、独逸語までも敵性国語扱いで、忌避して居た太平洋戦争の期間

の、西欧語鎖国。空洞化の埋合せに力を注いだら如何だ。物事の筋道は明確に。本音は医療費高騰の対策として、少しでも人件費抑制にと云う、姑息極まりない政索。どうせなら言葉を識らぬ医学部の卒業生にいろは歌の追加履修なんて寺子屋方式の授業が未だ増し。そう云えばノーベル医学賞なんて賞は実在してい居無い。全て医学生理学賞と表現され、生理学と抱合せで医学は始めてノーベル賞の対象と為り、一人前。この点、物理学賞や文学賞とは異なり、端っから半人前扱い。承知の上での卒後研修の付録付きと謂えば、これはこれひとつの見識であり、寧ろ、卓見とも云える。

矛先を転じて、社会的な難問解決へ向けて偶に組織される、有識者会議。之も言語明瞭で意味不明瞭。詰まる処、其れなりの賢者、知恵者の集まりだろうが、責任の所在が不明確な処がミソ。責任の分散化が見え隠れする。陰に隠れて意見を吐き、利いた風な御託を並べる。皆で渡れば怖くない式の卑怯者の集まり。男らしい団体とは云いがた難い。歯に衣を着せない表現が必要な場合に適宜、組織される。決して学者冥利に尽きる話ではない。選ばれたメンバーこそ良い面の皮、御愁傷様。

学者冥利と云えば、近頃、Otto AMが著したWarburgの一代記*。公開されるやネット上では、瞬時にして世界中から1000件を超える内容確認などの反響。癌の生理、代謝の解明、浸透が未だ不十分であった事の証か。このOtto女史こそ医学者冥利に尽きる御仕事を為されたと思えるが、如何であろうか。

*Cancer & Metabolism 4:5,2016

